

『教育じほう』一九六一年十一月（東京都新教育研究会）

準備教育は人間と社会を破壊する

国立教育研究所所員 矢口 新

わたしは、入学試験のための準備教育が存在することを、どうしても是認できない。試験準備のための補習教育、予備校、塾には賛成できない。そういう教育を、わたしは血迷った教育だと思う。いな、もつといえ、似非教育である。ところが、それが教育と見誤られているところに害悪や悲劇が生じる。この点が理解されないので、この問題の本質が見失われるのである。

入学試験を突破するための教育は、現に、学校の普通の授業で行なわれている。だからその点からいえば、予備校や補習教育や塾だけがわるいということではない。五十歩、百歩である。ただ、学校ではやはり本当の教育という点からの制約が多少ともあるから公然としない。予備校や塾はそれを公然とする。その点で露骨に問題が示されるから非難のまどになるだけである。

試験のための勉強と本当の勉強とを区別す

ることがむずかしいのが、一般にこういう問題について正しい判断ができない理由である。詳しくいえばきりがなが、簡単な例をあげると、わたしのうちの中学二年生は、今、歴史の教科書で歴史の勉強をしているが、試験のために勉強するとなると、どうしてもがむしやらにおぼえることになる。あの骨だけしか書いてない薄っぺらの教科書を、一年かかって、ただおぼえること、どんな試験問題が出てもできるようにしておくということ、で歴史はわからない。わたしは子どもがばかになりはしないかと心配である。そんなことより、おぼえなくてもよいから、もつといろいろな歴史書をよんで、一つのことがらでも人間の社会にどういう意味があったかを、しんみり考えてほしい。しかし、試験がわるいと子どもは劣等感を感じるから、本当の勉強などはどうでもよい、ただがむしやらにおぼえている。わからないことだからすぐ忘れる。

また、忘れたほうがよいことが多い。こうした勉強をどの教科もやっている。情ないことである。これくらいむだなことはない。

試験があるから人情だというわけで、みんなこぞってやっているが、たいせつな人生を浪費させている。そして、そういう勉強でもぜんぜんむだではあるまい。役にたつ事もあるはずだとはかない期待をよせている。しかし、そんなことをいえば、およそ人生にまつたくむだなことなどというものはない。たとえば歴史の勉強で中味はよくわからないが、一八六〇年に何があったということをおぼえていることも、長い人生で、どこかで役にたつかも知れない、とそういえば、それはそうであろう。しかし、そんなことより、マイナスがどれくらいかを考えてみる必要がある。人生の真実にふれない勉強をやつていればその人間は人生のわからない人間となる。しかも試験には突破できながら、その人生のわからない人間が優越感をもつ。くだらない勉強をした人間がそれで大きな顔をして世の中にはばをきかす。やりきれいなことである。反対に、本当の勉強をしても試験突破の技術を身につけていなければ、劣等感を感じる。こうして社会全体のふんい気が本当の勉強から遠ざかる。予備校や塾は、試験をやつ

てたえず点をつけて、人をかり立て、そういうふんい気をますます助長することに役だっている。学校も結局はそうである。

こうして人間は、それぞれが自分の本来の力をのばすことを忘れて、皆が皆、試験の点をばかり気にして、空虚なことをやっている。個性はのびない。自分の力で世の中に貢献するという考え方は出てこない。ただ、点だけで人をけとばすことを考える。こうして、人生の真実、道徳、社会への責任、友だちとの協力、ということは忘れられる。科学的精神といったものも問題にされない。

それぞれの人間はそれぞれ個性をもって、バランスのとれた生活を営み、それで社会に貢献して行くべきではないか。皆が皆試験科目をいちようにやって、形式的な点をとることばかり考えていて、日本の社会がどうなるか。